

心の海
誓同のこ
へ

笠岡市文化連盟創立40周年記念事業
笠岡市市制施行50周年記念事業

笠岡市文化連盟



笠岡市文化連盟 会長
安藤 一 泉

発刊によせて

この冊子は、「心にのこる笠岡のひと」と題して、笠岡市民の心の中に生きてきた人々の何人かを皆さんに紹介するために作成しました。また、平成14年は笠岡市文化連盟が生まれて40年、笠岡市が生まれて50年という年であり、その記念事業の一つとして刊行しました。

冊子作成にあたって、原稿を書いてくださった方、写真などの貴重な資料を提供してくださった方など大変多くの皆様から御協力をいただいたことに深く感謝をいたしております。

この冊子を読んだ子供たちの中から、この冊子の10人に匹敵するような人が現れることを念願しております。

平成14年5月

和尚さん教えて！

1672年(寛文12年)～1733年(享保18年)

目次

和尚さん教えて！	1
小野竹喬	5
木山捷平	9
小寺清先と敬業館	13
貫読講堂を寄付した佐藤貫一	17
歌人・国語学者・医師 関梟翁	21
福山藩の儒学者 関藤藤陰	25
社会事業家・僧侶・画家 津田白印	29
西井弘之	33
明治の翻訳王 森田思軒	37

※が付いている語句には解説があります。

子供の質問1 「井戸平左衛門ってどんな人ですか？」

和尚 ああ、びっくりしたよ。いきなりそう言われると。そうだ。5W1Hというのを知っているかな。英語の単語の頭の文字をとっているんだよ。

when：いつ

where：どこで

who：だれが

what：なにを

why：なぜ

how：どのように

その5W1Hで答えるよ。

- 60歳という高齢で、1731年(享保16年)の秋に代官になったんだよ。江戸幕府の家臣で30年も勘定所に勤めていた経験がかわれたんだろう。
- 石見(今の島根県)の大森というところの代官になり、続いて笠岡の代官も一緒に勤めたんだ。
- そのころ西日本は大飢饉、そのうえ伝染病も広がって、人々は飢えや病気で死んでいったんだ。
- 井戸公はみるにみかねて、年貢を大幅に減らしただけでなく、自分のお金で米や穀物を買入れて、困っている人々に配ったんだ。それどころか、最後には代官所の陣屋の蔵を開けて困った人に食べさせたんだ。そして、食べ物を作るため、井戸公はやせた土地でも作ることができる



井戸平左衛門肖像画(威徳寺蔵)

さつまいもに目をつけ、苦勞して60キログラムの種芋^{たねいも}を手に入れ、村の人々に植えさせたんだ。この芋^{いも}のおかげで、西日本の大飢饉^{だい き きん}の中でも井戸公が政治をしていたところは、一人の餓死者^{が し し ゃ}も出なかったんだ。

それで、井戸公は「芋代官^{いもだいかん}」と言われるようになったんだ。

5. でもね、1733年（享保18年）、江戸幕府から代官の仕事をやめさせられ



井戸公園（笠岡市笠岡）内にある井戸公をたたえる碑

れたんだ。幕府に相談せずに勝手に蔵^{くら}を開けて、米をみんなに食べさせたからなんだ。井戸公は笠岡^{じんや}の陣屋で幕府の命令を待つこととなって、大森をあとにすることになるんだ。大森の人々はみんなが別れを惜し^おんで見送ったようだ。

そして、心の苦勞が重くなって、その年の5月26日の夜、病気で亡くなったんだ。（自害^{じがい}したとも伝えられています。）そのとき62歳。その遺^{さい}がいは笠岡^{いとくじ}の威徳寺というお寺にまつ

られ、いっぽうの大森の人々は井戸神社を建てて、井戸公のご恩に報いようとしたんだ。

子供の質問2 「威徳寺にあるお墓に参る人はいるのですか？」

和尚^{おしょう} たくさん来られるよ。最近では、鳥根県のPTAの方が、生徒^{いっしょ}と一緒に55人来られたこともあるし、大田市^{おおだし}の人が、福山方面に来たというては参拝されるよ。それから鳥取県からもテレビの取材に来たこともあるよ。

子供の質問3 「笠岡の人はどうなんですか？」

和尚^{おしょう} もちろん来られるよ。絶えず来られるんでお花が枯れることはないよ。それから、井戸公をしのんで、「代官茶会」というのをやっているんだけど、多いときには700人もの人^{かもがた}が来られるんだ。そのときは、笠岡だけでなく、里庄^{かもがた}、鴨方、福山、井原といった所からも来られるんだ。

そうだ。君たちにも調べてもらいたいことがあるんだ。笠岡市と島根県^{おおだし}の大田市がなぜ都市縁組みをしたのか、それに、井戸公に関係した行事があったのかどうかなどを調べてもらえないかなあ。

子供の質問4 「井戸平左衛門さんの歌があるんですか？」

和尚^{おしょう} 井戸公園（笠岡市笠岡）の入り口のところにその歌があるよ。昭和11年にNHK広島放送局から放送史劇「芋代官井戸平左衛門」がラジオで放送されたこともあるんだよ。出演したのは当時の笠岡男子小学校（今の笠岡小学校）のみなさんだったんだ。その放送劇の中から流れてきたのが「芋代官さんの歌」だったんだ。

不作の年の	うえ死を
救う尊き	心より
移し植えにし	芋のたね
いかで忘れん	その恵み

芋代官が芋を植えて
民衆の飢えを救った
ことをたたえた歌

私の先祖も君たちの先祖もおそらく井戸公のおかげで命をつなぐことができたんだ。だから、井戸公にありがとうという気持ちを込めた「顕彰碑^{けんしょうひ}」というものが西日本各地に700箇所も立てられているんだ。

子供の質問5 「マンガにもなっているんですか？」

和尚 笠岡市内の多くの人から寄付をいただいて、井戸公についてのマンガ本を作って笠岡市内の小学校・中学校に配ったんだよ。里庄町の遠藤孝次さんの作品で、ひじょうに読みやすいんだ。学校にもあると思うから読んでみてね。



勘定所…江戸幕府で年貢やお金を扱う役所。
大飢饉…農作物が極度に不作で、食物が不足すること。
陣屋…役人が仕事していたところ。

小野 竹喬

1889年(明治22年)～1979年(昭和54年)



晩年の小野竹喬

○日本画家になるまで

笠岡の人から「竹喬さん」と親しみを持って呼ばれる日本画家の小野竹喬は、今から113年前の1889年(明治22年)11月20日に生まれました。父の名前は才次郎、母の名前は花代といいました。竹喬は本名を英吉といい、「竹喬」は画家としての名前です。男5人、女2人の7人兄弟の5番目でした。

竹喬の生まれた家は、JR笠岡駅

のすぐ近くで、現在の中国銀行笠岡支店の北どなりの位置にありました。しかし、残念ながら5年ほど前(平成9年)に取りこわされて、今では「小野竹喬生誕の地」と書かれた案内板が残されているだけです。

この竹喬の家は商売をしていました。家の表では、文房具やお菓子売り、家の奥では、ラムネ飲料水を作っていました。商家だったわけですが、家の中のふすまには中国の人物が描かれ、床には花鳥を描いた軸がかかるなど、家の中は日本画であふれていました。実は、竹喬のおじいさんは白神澹庵といい、また一番上のお兄さんは小野竹桃という日本画家だったのです。

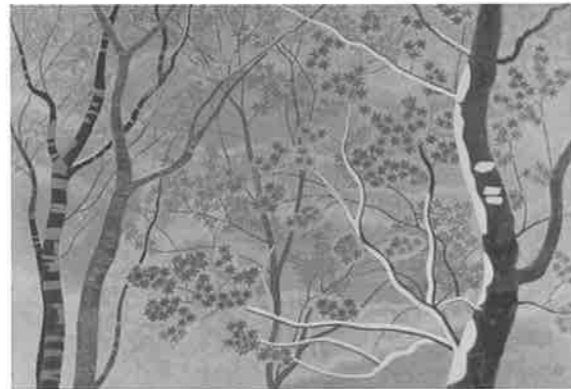
このような環境で育った竹喬は、幼い時から絵筆を持つのが好きで、動物図鑑などをていねいに模写していたようです。また、家が海に近かったので、城山に登って周囲の海を長い時間見つめることが楽しかったようで

す。

1903年（明治36年）、笠岡尋常高等小学校を14歳で卒業した竹喬は、お父さんの考えで家の商売を手伝うことになりました。しかし、絵描きになるのが夢だった竹喬は、あきらめきれず、お兄さんの竹桃（益太郎）にお願いして、お父さんを説得してもらいました。ようやく許しを得た竹喬は、この年の11月に京都に行き、竹内栖鳳という有名な先生の所で絵の勉強をしました。

○ふるさと、笠岡を描く

竹喬は、14歳で日本画家の道を歩き始め、昭和54年に89歳で亡くなるまで、75年間、日本の自然の美しさを描き続けました。人物や花鳥、静物などを描くことはほとんどなく、風景を一筋に描いたのです。



樹間の茜 1974年

素朴な自然の美しさを求めて、日本の各地を訪れて取材をしました。その中で、ふるさとの笠岡を中心とした瀬戸内海は、竹喬が好んで描いた場所です。竹喬は、笠岡のことを次のように語っています。

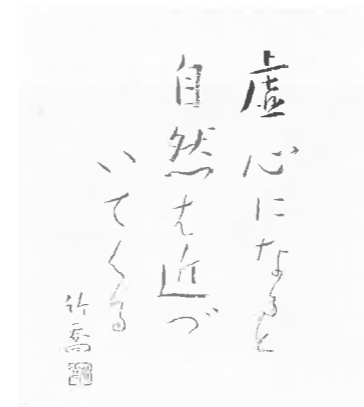
「夢見るような海の音、段々畑を積み重ねた島々、それは伽の国のように、甘美な世界である。」（『わたしのふるさと』昭和31年11月）。

竹喬の作品に見られる、温かさ、柔らかさ、明るさ、そして素朴な雰囲気は、ふるさと笠岡の海の美しさから生まれたものかも知れません。

竹喬が笠岡を描いた代表的な作品に、1916年（大正5年）の《島二作》と昭和3年の《冬日帖》があります。

《島二作》は、今では橋でつながっている神島の早春の風景を二つの軸

に描いたものです。カブトガニ博物館がある場所から南側に見える神島の山すそが、描かれた場所です。竹喬は、神島瀬戸と呼ばれるこの辺りの風景



竹喬の色紙
「虚心になると
自然に近づいてくる」

をこよなく愛していました。明るい瀬戸内の陽光に照らされたのどかなこの作品には、竹喬の性格が素直に表れています。竹喬はこのころ、ヨーロッパの近代絵画、特にセザンヌの影響を強く受けていました。セザンヌの構図の作り方や色の使い方を勉強して、目の前にある自然の美しさをそのままに表現しようとしたのです。

また《冬日帖》は、冬の笠岡の山と池と海を、それぞれ2面ずつ、ノートのような形式にして6面1セットでまとめたものです。面相筆というとても細い筆を使って、こまかな線と点でいていに自然のすみずみまでも描いています。濃い色を使わず、薄い色を柔らかな筆遣いで画面に描いています。竹喬は、ヨーロッパから帰国後、日本の古い絵画の中に線の表現の美しさを発見します。



海 1971年

大胆な筆の使い方ではなく、繊細で柔らかな筆の運びに竹喬は新たな持ち味を見出します。冬枯れた景色のシリーズですが、意外にほのぼのと心温まる思いになるのは、瀬戸内の風光という題材以上に、竹喬の温和な人柄が画面から伝わってくるからでしょう。

竹喬は、この《島二作》、《冬日帖》以外にも、城山から見渡した風景、笠岡諸島を海上から望んだ風景など、生涯にわたってふるさと笠岡を数多

えが
く描き続けたのです。

○日本を代表する、竹喬

竹喬は、明治以後の日本画家のなかで、色彩の表現が特に優れていたといわれます。そのために「色彩画家（カラリスト）」と呼ばれています。日本の自然の四季の変化、また一日の朝から夕方に至る変化、そのささやかな自然の息づかいともいえる



竹喬美術館（笠岡市六番町）

変化を、色彩としてとらえて表そうとしたのが、竹喬の大きな特徴です。また竹喬は、日本画を勉強し始めたときから、俳句も始め、その時々思いをスケッチ帳などに記しました。松尾芭蕉という江戸時代の俳人に強くひかれて、竹喬は87歳のとき《奥細道句抄絵》という代表作中の代表作を完成しました。芭蕉がよむ日本の自然の美しさを、竹喬は自分自身の眼で追いもとめて10点のシリーズに完成したのです。この大きな成果により、昭和54年文化勲章を受章しました。

昭和57年には笠岡市立竹喬美術館が開館し、さらに平成13年には新館も完成して、竹喬の親しみやすい清々しい風景画は、いっそう多くの人々に愛されるようになりました。いまや、美術館そのものが「竹喬さん」と呼ばれるほどに笠岡市民にとって、身近な存在になりつつあります。

木 山 捷 平

1904年(明治37年)～1968年(昭和43年)

木山捷平(詩人・小説家)は明治37年(1904年)3月26日、岡山県小田郡新山村山口(今の笠岡市山口)で生まれました。地元の新山小学校を優等で卒業、岡山県立矢掛中学校(今の矢掛高等学校)へ進学。片道8kmの道を徒歩で通学しました。捷平は小学校時代、病気などで長期欠席することもありましたが、中学校入学後の徒歩通学が健康づくりに大いに役立ったと、後年述懐しています。



木 山 捷 平

矢掛中学校2・3年のころから文学に興味を持ち始め、文学書や文学雑誌を愛読しました。4年生のころには樹山宵平のペンネームで、中学生の文芸雑誌『文章倶楽部』などに、詩・短歌・俳句を投稿し、生田春月・若山牧水・荻原井泉水らの選者たちに認められ、注目されるようになります。また、5年生になると、同級生数人とともに同人雑誌『余光』を発行し、自作の詩歌や童話・論説を発表するなど、旺盛な文学活動を展開します。

1922年(大正11年)、矢掛中学校を卒業した捷平は、父の強い勧めで姫路師範学校に進みますがやはり詩作に意欲を燃やし続けていました。翌年3月、19歳で師範学校を卒業した捷平は兵庫県出石町の弘道尋常高等小学校に勤務します。

しかし、詩人になることへの夢を捨てきれない捷平は、1925年(大正14

年)3月この学校を退職し、父にも無断で上京し、東洋大学文化学科に入学します。父は激しく怒り、学費もほとんど送ってもらえなかったのに、捷平は苦しい生活に堪えながら勉学と詩作に励むのでした。



木山捷平の生家(笠岡市山口)

このころ井原市出身の先輩

詩人赤松月船の門をたたき、月船が主宰していた『朝』という詩誌の同人となり、これを通して黄瀛(中国からの留学生で、のち中国陸軍の高官となる)や佐藤八郎・吉田一穂・草野心平ら著名な詩人と知り合いました。そして月船の紹介で『万朝報』に詩3編が掲載され、捷平は詩によって初めて原稿料をもらい、詩人としてのデビューを果たしたわけです。21歳の時でした。

1927年(昭和2年)に病気にかかって帰郷、郷里と姫路で療養しながら詩作を続けます。そして姫路市南畝町で個人詩誌『野人』を発行する(5冊まで出す)など、詩作活動に心血を注ぎます。

1929年(昭和4年)再び上京し、5月に第一詩集『野』(45編収録)を抒情詩社から、また1931年(昭和6年)6月に第二詩集(51編収録)を天平書院からいずれも自費出版します。



木山捷平全集

この年11月、捷平(27歳)は宮崎みさを(23歳)と結婚。翌1932年(昭和7年)8月、二人は新婚旅行を兼ねて奥さんの郷里山口県を訪れます。帰途、

宝塚や城崎温泉を巡ったついでに、捷平はかつて小学校教師をしたことのある出石町を訪ねます。ここで旧友や教え子たちの温かい歓迎を受け、出石の町へ一層深い愛着を感じます。そうしたことがきっかけとなって、捷平は10年前の小学校教師時代の体験を基とした小説「出石」を書き、古谷綱武・太宰治らと共に創刊した『海豹』という同人誌に発表しました。1933年(昭和8年)3月のことです。これで捷平は小説家としての第一歩をふみだしたわけです。しかし、捷平は決して詩作をやめたわけではありません。生涯詩作を続け、1967年(昭和42年)には第三詩集『木山捷平詩集』を昭森社から出版します。

以後、幼少年時代の郷里での生活体験を題材にした「うけとり」「おじいさんの綴方」「尋三の春」「修身の時間」など、父をモデルにした「子におくる手紙」「村の挿話」「父危篤」「春雨」など、また小学校教師時代の体験を素材にした「出石城崎」「一昔」「掌痕」などの優れた作品を数多く発表。

1939年(昭和14年)には第一創作集『抑制の日』を出版、15年には第二創作集『昔野』、16年には第三創作集『河骨』と出版を続け、生涯に8冊もの創作集(全収録小説百余編)を出版しています。



笠岡市立図書館内にある
木山捷平コーナー

1941年(昭和16年)には太平洋戦争が勃発し、多くの作家たちは報道班員として戦地に赴いたり文学報国会を結成したりして戦争に協力しました。こうしたなか捷平は1944年(昭和19年)12月、満州農地開発開公社囑託として新京(今の長春)へ行きます。ところが翌20年8月現地召集を受け、ソ連軍進攻に備えての戦闘訓練中に終戦、九死に一生を得ます。その後約1

年間、生死の間をさまようような難民生活を送って、1946年(昭和21年)8月郷里の山口へ帰還します。こうした満州での苦難に満ちた体験を基にして書いた小説が「帰国」「幸福」「耳学問」「苦いお茶」「^{ちょうしゅん ウーマロ}長春五馬路」などの傑作です。特に1962年(昭和37年)に発表した長編『大陸の細道』が^{げいじゆつせんしょう}芸術選奨文部大臣賞を受賞し、^{しょうへい}捷平は一躍一流作家の仲間入りをしました。その後小説だけでなく、^{※ずいひつ}随筆や旅行記なども数多く執筆しますが、1968年(昭和43)8月23日^{がん}食道癌で亡くなりました。64歳でした。捷平の作品は『^{きやましょうへい}木山捷平文学全集』『^{こうだんしゅ}講談社文芸文庫』などに収録され、たやすく読むことができます。



古城山公園(笠岡市笠岡)にある
木山捷平の詩碑

古城山公園(笠岡市笠岡)にある
木山捷平の詩碑

師範学校…昔の教員養成のための学校。

主宰…中心となって全体をとりまとめること。

同人誌…志・好みを同じくする人が発行する雑誌。

修身…第二次大戦前の小・中学校などの教科目の一つ。国民道徳の実践を目的としました。

随筆…見聞きしたことや心に浮かんだことなどを気ままに自由な形式で書いた文章。またその作品。

こでらきよさき けいぎょうかん 小寺清先と敬業館

こでらきよさき
小寺清先は今から250年余り昔の人で、父は清統きよつぐといい、陣屋稲荷じんやいなり(笠岡小学校の南の丘にある)の神主かみぬしでした。

きよさき
清先は20歳にもならないときに、京都のト部家うらべという神道の本部※しんとうから呼ばれて神主かみぬしのテストを受けました。神の教えを説明させたら話が分かりやすく、言葉も態度も^{げんしゆく}厳粛で、聞かせる者が自然に姿勢を正して聞くような^{ふんいき}雰囲気ふんいきを持っていたので、試験官が感心しました。



小寺清先の肖像画

1772年(安永元年)、ト部家うらべの中で争いがあり、清先きよさきを呼んでどちらが正しいか聞いたら、清先きよさきは両方の言い分を聞いて、両方を傷つけないように納得させました。そのことは、ト部家うらべにとっても良かったので、一同感心しました。そのとき清先きよさきは26歳でした。

ト部家うらべに松岡仲良まつおかちゅうりょうという学者がいて、ト部家うらべの全体の世話をしていましたが、清先きよさきの才能を見て、「私に代わって後を引き受けてほしい。」と何回も清先きよさきに頼みました。しかし、清先きよさきは「父が高齢こうれいで寝ておりますから・・・」と断りました。清先きよさきは父をととても大事にし、父の顔を見るだけでどこが悪いかわかるほど小さいことにも気を使って介抱かいぼうしました。父が亡くなると、喪もに服する日数が神道で決められていましたが、その倍の日数をも喪もに服し、父の死を悼いたみました。

1797年(寛政9年)今から約205年前、清先きよさきは神主かみぬしの仕事きよゆきを長男の清之

に渡して、自分は竜王山のふもと（笠岡市笠岡）に隠居しました。

「楢園」と名札を掛けて号としました。しかし、清先は休む暇はありませんでした。当時笠岡と久世（今の岡山県久世町）の両方の代官だった早川八郎左衛門が清先が優れた学者であることを知り、笠岡に学校を建てることを考えたのです。当時笠岡は、久世から往復4日もかかりました。

早川代官は、よい政治を行い、久世に「典学館」という学校を建てたことで有名になり、幕府から賞を受けたほどの名代官でした。例えば、税金はきちんと納めさせましたが、農民が困るような無理を言いませんでした。また、捨て子などしなくてもよくなるように、生活のことを書いた「久世條教」という教科書を出して、毎月村を回って、農民にいろいろ教えるなど、民衆のことを考えた政治を行っていました。

早川代官は、笠岡へ学校を建て、清先にそこの先生になってもらいたいと考え、町の人たちに相談しました。みんな清先に教えてもらいたいと賛成して、



笠岡小学校にある敬業館の扁額

商人でお金持ちの人たちは15人ほどで250両も集めました。敷地は、約25.5メートル四方で約650平方メートルもあり、家はすべて瓦屋根でした。町人は屋根に瓦を使うことは許されなかった時代でしたから、4棟の学校の屋根が日に輝くのを見た人々は胸がどきどきした



平成4年度に一部復元した敬業館
(笠岡市笠岡)

ことでしょう。勉強をしたい人は誰でも入学できたのですから、瓦屋根の

建物を使えることは、町民の大きな喜びだったに違いありません。

学校の棟上げを幕府に報告し、「敬業館」という大きな額を幕府からもらいました。

勉強の中身は、「四書」や「五経」などの中国の古い時代の書物でした。清先が教えることになったことを早川代官は喜んでいました。毎日授業があったので、敬業館で教える先生は清先一人では無理でした。清先の長男の清之が陣屋稲荷の仕事がない時間は、父の清先に代わって授業に出てきました。

生徒の中には、普通の学校の先生より優れた人が何人もいました。優秀な儒学者であり、政治家だった関藤藤陰（この本で紹介しています。）は、10歳代後半から8年間敬業館で学びましたが、敬業館で学んでいたころから非常に秀才でした。

また、敬業館ができたことを聞いて、岡山県内だけでなく広島県や大分県などから留学生が集まり、多いときは28人もいたということです。当時留学生として来ていた人の中には、後に学者や政治家として活躍し、有名になった人が多くいます。その人たちは、また別の学校で教えていたこと

でしょう。敬業館は、お金のある商人、それと先生の小寺清先で程度の高い学校として運営されました。発案者は早川代官ですが、笠岡の人々の力があつたから成功したといえます。

敬業館の教授ですが、1代目の小寺清先1798年（寛政10年）に始まり、2代目の廉之、3代目の完之の1850年（嘉永3年）まで53年間も続きました



敬業館内にある
早川代官をたたえた碑

た。

発案者の早川代官は、1801年(享和元年)埼玉県の久喜(今の久喜市)の代官として転勤します。代官は久喜でも遷善館せんぜんかんを建てましたが、早川代官は1808年(文化5年)に亡くなり、遷善館は1878年(明治11年)に火事で焼けてしまいました。敬業館けいぎょうかんは、物価が高くなり、用意してあったお金がなくなったので学校を続けられなくなりました。敬業館けいぎょうかんを始めたころには、米1俵の値段が1,500文もんだったのが、敬業館けいぎょうかんがなくなったころには、6,700文もんにもなっていました。



小寺清先の墓
(笠岡市笠岡)

神道…日本民族固有の伝統的な宗教的考え方や生活様式。
隠居…仕事をやめてのんびりと暮らすこと。
号……学者などが、本名のほかにつける名。

かんえつこうどう 貫読講堂を寄付した さとう かんいち 佐藤 貫一

1891年(明治24年)～1964年(昭和39年)

六番町に現在の市民会館が完成するまでは、笠岡市民の多くの人たちにとって、笠岡小学校の中にある「かんえつこうどう 貫読講堂」の名前は、人が集まる施設しせつとして最も親しまれてきたものの一つだったでしょう。

市民会館ができるまでは、市民が集まる大きな建物がなかった笠岡の町にとって、この講堂は長い間、市民の集会場としての役目を果たしてきたのです。この建物は小学校の講堂としての役目のほかに、市民のいろいろな集会や行事のための建物、言いかえると今の公民館や市民会館のような働きを、長年してきたということです。



佐藤 貫一

かんえつこうどう ○貫読講堂のあらまし

かんえつこうどう 貫読講堂の寄付者は、さとうかんいち 佐藤貫一さんです。建築費用の^{*}77,500円を笠岡町(笠岡市になる前、今の笠岡市笠岡は笠岡町)に寄付されたのです。建築様式は木造2こう式トラス。着工は1941年(昭和16年)10月、落成式は翌年7月。講堂の坪数は233坪、付属倉庫は12坪、渡り廊下は12坪。講堂に入ることができる人の数は3,200人です。

昭和17年7月8日に行われた落成式は、笠岡町あげてのにぎやかなものでした。当時、今の笠岡小学校の所に第一国民小学校(男子校)、第二国

民小学校（女子校）という学校があり、全校生徒に紅白の「はくせっこう」というお菓子が配られたそうです。

○「貫閑」という名前の起こり

「貫閑」の名前の命名者は、井原市にある興議館（今の興議館高校）の三代目館長、山下秋堂先生です。この名前の出所は、「松柏の緑は、四時を貫き千載を閑する」という言葉から名付けられたとい



笠岡小学校内にある貫閑講堂

います。この言葉の意味は、松と柏の木のことで、松・柏ともに常緑樹で青々した葉の色を変えないため、人が自分の正しい考えをかたく守って変えないことのたとえに使われます。この言葉は、中国の古い『詩経』という書物によるものとされてきましたが、ある人の調べで間違いだと分かり、実際は、山下秋堂先生の作った佐藤貫一さんへ贈られた漢文の感謝状の一節が基になっているといわれます。

○佐藤貫一さんのこと

さて、この立派な講堂を当時の笠岡町へ寄付された佐藤貫一さんとは、どんな人でしょうか。佐藤さんは、1891年（明治24年）11月16日に、笠岡東本町で営業していた佐藤紙店の長男として生まれました。

1902年（明治35年）3月に、笠岡尋常高等小学校の尋常科を卒業し、同39年に高等科を卒業しました。その後、当時の衆議院議員だった井原市出身の池田寅次郎氏をたよって上京しました。東京で池田氏の書生をつとめるかたわら、早稲田の夜学校に入って勉強をします。

その後、中国に渡って上海にあった東亜同文書院に入ります。そのまま終戦まで中国を舞台にして活躍し、中国に40数年という長い間住んで、漢口から重慶、南京などのまちで製粉会社、酒造会社、しょうゆ会社を経営して、南京商工会議所会頭や南京居留国民会議議長など、中国にいる日本人の財界人として重要な仕事をしてきました。

昭和15年ごろのことです。貫一さんの妹菊さんの長男宏一氏（そのころ東大の学生）が「笠岡の小学校の講堂が狭いから、貫一伯父さんに寄付して建ててもらったらいのに。後世まで残るし、笠岡には多くの人が集まれる場所がないからなあ。」と言ったことから、菊さんはさっそく貫一さんに建てるなら、早いほうがよいとすすめ、それがもとで、「貫閑講堂」を町へ寄付することになったといえます。

そのころ、東京には日比谷公会堂、大阪には中之島公会堂のような立派な建物があり、岡山県には大原美術館のような後世に残る文化遺産がありました。しかし、笠岡にはそのような立派な建物がなかったため、貫一さんは、せめて後々多くの人がいままで利用できる建物を建てることを提案し、笠岡町、笠岡小学校が相談したうえで決まったのです。

終戦後、貫一さんは、笠岡へ帰ってきましたが、中国で長年苦勞して築いた地位や財産は、敗戦のために失われ、ほとんどお金がなくなっていました。やがて、1957年（昭和32年）になって京都へ移り、その後、神奈川県藤沢市辻堂に移転します。

のちに、大阪で弁護士をしていた長男潤太氏のもとに、身を寄せていましたが、1964年（昭和39年）7月19日に73歳で亡くなります。お墓は笠岡の

伏越・地福寺というお寺の中にあります。

貫一さんの長男潤太氏の話によると、貫一さんは、中国での生活が長かったため、中国語は相当にできたらしく、中国のえらい人から「南京語は私より、上手ですね。」と言われたのが、ただ一つの自慢だったようです。父が私に残してくれたのは「目は気力、肌は生活、背は齡」という言葉と、体調が続いている間は、働き続けた生き方だったのでしょと、その思い出を語っています。

77,500円…当時米1kgが33銭、牛乳1本が8銭だった。

木造2こう式トラス…木で3角形を組み合わせて建物を支える建築方法で、大きな空間を作るために使われる。貫閣講堂も広い空間ができています。(天井を支える柱がない)

坪…1坪は約3.3平方メートル。

笠岡尋常高等小学校…当時の小学校は尋常科が6年、高等科が2年だった。

書生…他人の家に寄宿して、家事を手伝いながら勉強する学生。

歌人・国語学者・医師 関梟翁

1786年(天明6年)～1861年(万延2年)

関梟翁は、江戸末期の優れた歌人、国語学者、そして医師でした。

本名は関藤政方。本名以外に、花林・杏隠・葭汀・梟翁、屋号は嘉平田舎・鶏頭樹舎(どちらも、かえでのやと読む)と名乗っていました。

1786年(天明6年)12月、小田郡吉浜村(今の笠岡市吉浜)に生まれました。福山藩に儒学者として政治にあたった関藤藤蔭の兄にあたります。若いころに京都に行き、村上伊豆守に医学や中国の学問である漢学を学び、後笠岡へ帰ってから、敬業館教授の小寺清先に日本の古くからの考え方を研究する国学を学びました。

文政年間(1818～1830年)には、小田郡笠岡村(石橋町)で医者として繁盛しました。

梟翁は地理学者の古川古松軒や、儒学者・詩人の頼山陽、歌人の平賀元義らと親交がありました。また、桂園派の歌人香川景樹の門下であった菅沼斐雄とは同じ土地の出身で、幼なじみでした。

のちに歌人木下幸文と出会い、高橋まさずみ、はぎはらひろみちののぐちかまさ、こんどうよしき、ふるいちきんが樹、古市金峨らとも親交を深めるようになりました。

1845年(弘化2年)の還暦の祝いに、門人から贈られた鴨の羽毛入りの服を着るようになり、それから後は「梟翁」と名乗るようになったといわれます。



今も残る梟翁の短冊
右は長生きしたことを祝う歌
左は旅人のことを想像して詠んだ歌



古城山のふもとにある
関梟翁の墓

梟翁は歌集をたくさん出版しました。
最初の歌集「安左豆久毗」には、28歳
の1813年（文化10年）から1819年（文政
2年）までの7年間に作った、短歌367
首と長歌2首が収められています。

「初日影」は、1834年（天保5年）
から1838年（天保9年）までに作った
短歌648首と長歌・長詩各1編。

「嘉平田舎詠草」には、1843年（天保
14年）の短歌175首、文3編、長歌5首。
15年の短歌155首、文1編、長歌1首の
2年間の作品。

「耳鳴集」は、1847年（弘化4年）の1年間の歌266首。

「（再）嘉平田舎詠草」には、1853年（嘉永6年）から1860年（万延1年）

までの晩年8年間の和歌519首が収められています。

梟翁の著書には、歌
集のほか、「傭字例」
「声調編」「神医方考註」
「言葉のかけはし」「春
風消息」などがありま
す。

このうち、「傭字例」
「声調編」は一般の読
者にはむずかしいもの
でしたが、国学の研究
者には高く評価されました。



菅原神社（笠岡市吉浜）にある
梅歌千首集録

「傭字例」は1834年（天保5年）に刊行され、1842年（天保13年）には
弟の関藤藤蔭のあとがきを添えて再版されました。「傭字例」は、日本語
の音の「ン」と「ム」との区別を明らかにし、漢字の和音の誤りを直すな
ど、当時としては大変進んだ学説で、その続編ともいべき「声調編」と
共に有名だったのです。

1834年（天保5年）に著書『傭字例』を刊行した後、小野務の仲介で
若狭（現・福井県）の学僧義門が梟翁のもとを訪れていますが、このこと
からも専門家の間では、評価の高かったことがうかがえます。

1856年（安政3年）、梟翁は、亡き父政信が望んでいて果たせなかった
梅の歌千首（「奉納梅歌千首集録」）を、吉浜の菅原神社に奉納しました。

この歌集は梟翁が50年にわたって、各地の有名な歌人に詠んでもらっ
た梅の歌を集めたものです。北は東北地方から南は九州まで、27地域394
人の歌が集録され、5巻の巻物になっています。現在も菅原神社に大切に
保管され、昭和34年には笠岡市文化財に指定されました。

梟翁は、1861年（万延2年）1月に75歳で亡くなりました。墓碑は古城
山公園の登り口にあり、辞世の歌「わが魂の行へやいづくしら雲のたたむ
山べの松のした陰」（わたしの魂の行く先はどこだろう、白雲が折り重な
る山のほとりにある松の木陰の見えないところだろうか）と刻まれていま
す。墓は昭和48年に笠岡市の史跡に指定されました。

屋号…家の通称。

桂園派…江戸時代後期の和歌の一派。

還暦…干支が60年たつと一回りして、元にかえるところから、数え年で61歳
をいう語。

長歌…和歌のかたちの一つ。五音と七音の二句を三回以上続けて最後を七音で止めるのが原則。

辞世…死ぬ時に残す詩歌・言葉など。

福山藩の儒学者 関藤藤陰

1807年(文化4年)～1876年(明治9年)

○生い立ち

関藤藤陰は、江戸末期の儒学者で政治家です。笠岡市に生まれ、井原市に育ち、頼山陽門下の優れた人物で、江戸幕府末期の動乱期に国の政治を行った老中首席の福山藩主の阿部正弘に仕えて立派な仕事をした家臣です。幼い時の名前は元五郎といい、本名は成章といました。通称を淵蔵といい、後に和介・文兵衛と名乗りました。

1807年(文化4年)2月24日に、小田郡吉浜村(今の笠岡市吉浜)で、神社で仕事をしている神官の関藤政信の四男として生まれました。

幼い時、父母に死に別れたため、1812年(文化9年)に後月郡西方村(今の井原市西方町)の医師石川順介の養子となりました。隣り村の木之子村(今の井原市木之子町)の田川泥亀に師事して、中国古代で尊敬された人々の教えをしるした経書を学びました。

14歳のとき石川家を去って、笠岡の兄の関政方(関鳧翁)の家に移り、日本の古くからの考え方を研究する国学や中国の学問である漢学を研究し、このころ、笠岡で敬業館という塾を開いていた小寺清先一家の人々から、日本や中国のそれぞれの学問を教えてもらいました。



関藤藤陰

○頼山陽に信頼される

22歳のとき、京都に行き、儒学者、詩人として有名な頼山陽の弟子となりました。藤陰は塾で教えるようになり、頼山陽の家の家政にもたずさわ

り、山陽と生活を共にして信頼されました。
1832年（天保3年）、山陽は突然に血を吐いて重体となり、当時作っていた歴史の本である『日本政記』の修正を藤陰に任せました。

その年の9月に山陽が死んだあとも、1年間、頼山陽の家の家政の整理や、山陽から頼まれた『日本政記』の完成につとめました。

○福山藩で国の政治のために駆け回る

1842年（天保13年）儒学者として福山藩主の阿部正弘に召し抱えられました。1856年（安政3年）、藩主正弘の命を受けて蝦夷（今の北海道）・樺太（今のサハリン）・エトロフ島（千島列島の島）を探検し、『観国録』（公的な調査報告書）『蝦夷紀行』（紀行文）を著します。

翌年、再び北蝦夷の探査を命じられ、樺太に渡りますが、藩主の阿部正弘が亡くなったので途中で帰国しました。

その後を継いだ藩主阿部正教も23歳で亡くなり、その弟の正方が14歳で継ぎ、藤陰は幼い藩主を助けましたが、1867年（慶応3年）に正方も20歳で亡くなりました。

1868年（慶応4年）鳥羽・伏見の戦いがあり、長州藩の藩兵が東へ向かっていく途中に、福山城は周りを囲まれました。藤陰は藩の重臣とともに長州方と話し合いをし、戦いをやめることに成功して、福山の藩と城下町を危機から救いました。この時、62歳だった藤陰は、老臣として藩の政治をリードし、死を覚悟して事に当たったといわれます。

○阿部家の家令となる

その後、広島藩の浅野家から、最後の福山藩主として正櫃を迎えます。

1871年（明治4年）に、「廃藩置県」により、もとの藩主の正櫃が華族になって東京へ移住することになり、藤陰は頼まれて家政の仕事に当たります。

このころ、東京で役人をしていた、もと興議館初代館長の阪谷朗廬との深い交友関係が続きます。

藤陰は、1876年（明治9年）12月、70歳で亡くなり、東京谷中天王寺の墓地に葬られました。

その著書に「杜詩偶評説」、「詩書筆記」、「文章規範筆記」、「藤陰遺稿」などがあります。また、『日本政記論』を完成させました。

○顕彰

1976年（昭和51年）12月、藤陰の没後100周年を記念して、福山市の市民有志によって「関藤藤陰先生碑」が、福山市民図書館の庭に建てられました。

碑文は親交のあった阪谷朗廬によって、藤陰の死後1年余り後の1878年（明治11年）3月に、藤陰の一生をしのんで作られていた1200字を超える長い文章がそのまま刻まれています。その文の終わりに「吉備之國。第一流の人、文人には愧ずる有り。人文には愧ずる無し。」（岡山県の古い呼び方である吉備の国で第一等の地位にある立派な人物である。文章のできばえは人柄よりも劣ってはいずかしいところがある。けれども、人柄は文章の出来栄よりもすぐれていて、はずかしいところはない。）という賞賛の言葉が記されています。

儒学者…中国の政治・道德の教えの儒教を研究し、その教えを説く人。

頼山陽…江戸時代後期の儒学者・歴史家・漢詩人・書家。

老中主席…江戸幕府の役人の最高責任者。

紀行文…旅行中にしたこと、行ったところ、見たり聞いたりしたこと、感じたことなどを書いた文。

鳥羽伏見の戦い…江戸幕府の軍と薩摩（今の鹿児島県）・長州（今の山口県）軍の戦争。

廃藩置県…江戸時代が終わり、藩がなくなり県が置かれること。

華族…明治憲法で、皇族の下に置かれ貴族として扱われた身分。現在は廃止されている。

社会事業家・僧侶・画家 津田白印

1862年（文久2年）～1946年（昭和21年）

○生い立ち

笠岡の黎明高校のグラウンドの一角に、同校の前身である淳和女子高校の創設者・津田白印の胸像が学園を見守るように立っています。白印は同校をはじめ育児院を創設したほか、社会のためにつくした人であり、画家、僧侶でもありました。



晩年の津田白印

津田白印は、1862年（文久2年）4月1日、笠岡の浄土真宗浄心寺の住職、津田明海の次男として生まれました。本名は明導といい、一般に「白印」または「白道人」として知られています。

19歳のとき、豊前（今の福岡県豊前市）に行き、仏教学と中国の学問の漢学を本格的に勉強しました。

同時に長崎派の画家・成富椿屋の弟子となって南画を学びました。

○育児院の創設

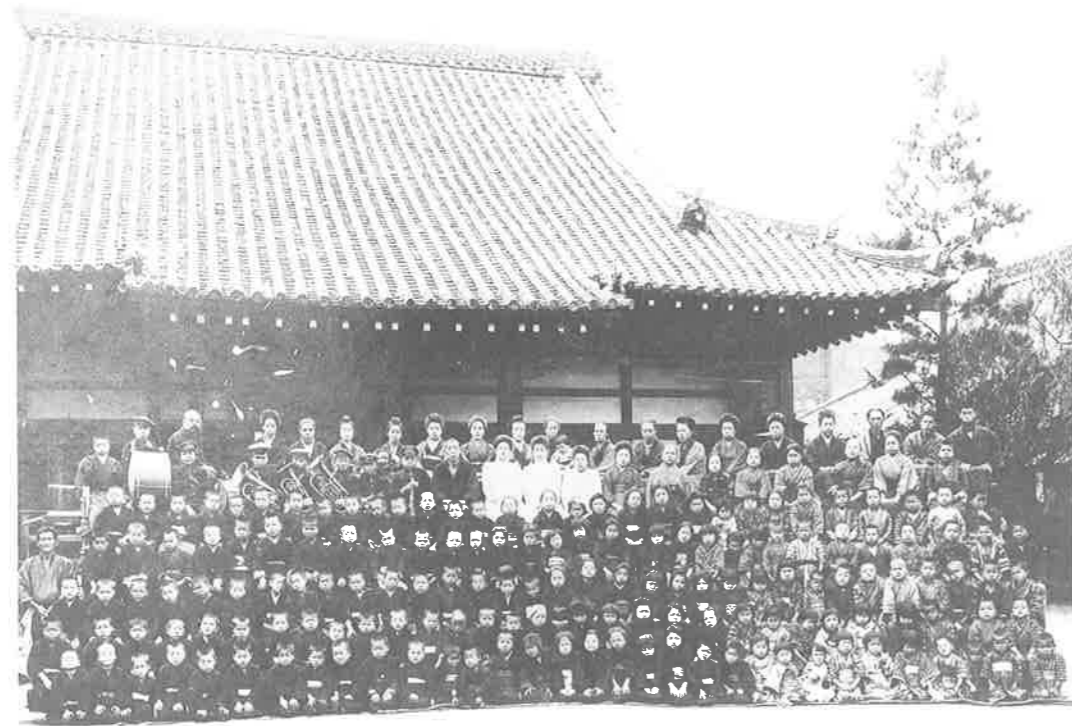
明導が30歳のとき、奈良監獄（奈良県）の受刑者に正しい道を教える教誨師となり、罪を犯した少年たちを立ち直らせる仕事をしました。

しかし、一度罪を犯した者は、いったん社会に戻っても、世間の目や追い詰められた生活のため、再び罪を犯してしまいやすいことを実感していました。この経験が社会事業家を志すきっかけとなったのです。

白印は、社会の底辺で苦しむ人々を救おうという使命を感じて、38歳のとき、長崎県佐世保市教法寺で、育児院設立の目的を書いた文を印刷して広く世間に配りました。

その目的に賛同した人たちからお金や衣類などが届けられ、明導は意外に温かい世間の理解のある反応に喜び、故郷笠岡に帰りました。

翌1900年(明治33年)1月に、富岡の本林寺内に両親がいない孤児が生活できる施設の「甘露育児院」をつくり、孤児の生活を支えると同時に指導をしました。



甘露育児院(明治43年ごろ)

1906年(明治39年)4月、東北地方で農作物がとれなくて食べ物がない大飢饉があり、その様子を実際に見るため東北の現地に行き、身寄りのない孤児108人を笠岡へ連れて帰りました。ところが、急に大勢の孤児たちが増えたので、本林寺が手ぜまになり、甘露育児院を笠岡の浄心寺内

に移転しました。

○女子教育の充実



白印の色紙「蘭」

第一次世界大戦後の好景気の影響で、孤児院の子供の数が減る一方で、女子の学校に行きにくい状況が問題となり、女子教育を充実するために、白印は1923年(大正12年)に私立淳和女学校(のちに淳和女子高校となる。今の黎明高校)を創立します。その後も28年に淳和女子職業学校を併設するなど、女子教育の充実に力を注ぎました。

これらのさまざまな方面にわたる事業を行っていく上で、たびたび経営の危機に直面していますが、白印が自分で描いた書画を売って得た収入によって、運営資金を集め、事業を行ったことは有名な話です。

白印が40歳になったとき、前頭部に一かたまりの白髪ができました。これを知った親友の島地黙雷が「白印」という号を贈ったといわれます。

○温和人柄、気品にあふれた書画

1946年(昭和21年)2月、白印は85歳で死去します。優れた花鳥図や山水画を数多く残し、幅広い学識や、温和人柄を反映した作品は、気品にあふれ、今なお高い評価を得ています。

没後の1956年(昭和31年)の10周年忌に、門弟や知人らが集い「白印顕彰会」を結成します。翌年3月、淳和学園の校庭に「白印」の胸像を建設しています。また、1980年(昭和55年)10月に、笠岡の古城山公園に白印

が書いた「一如」の碑が建てられています。

白印の著書には「道のはなし」「人間苦の解剖とその解説」「幻の殻を破る」「自然に目覚め自然に進め」など、仏教や宗教に関するものが数多くあります。



古城山公園にある碑「一如」

○「黎明学園高校」の新発足

白印は、私立淳和女学校を創設しましたが、白印の死後も学校は淳和女子高校として存続され、1997年（平成9年）に男女共学の「黎明学園高校」として新発足しています。



小丸より黎明学園高校を臨む

僧侶…お坊さん。

長崎派…江戸時代、長崎で、外国の影響を受けた絵の一派のこと。外国の新様式を取り入れ日本画に大きな影響を与えた。

南画…中国の伝統的な自然や風景を描いた山水画のこと。

監獄…受刑者などを入れておくところ。

教誨師…刑務所で受刑者などに対して改心するよう導く人。

にし 井 ひろ ゆき 之

1991年（明治44年）～1985年（昭和60年）



西井弘之

西井弘之先生は、1911年（明治44年）2月28日に倉敷市玉島で生まれ、1985年（昭和60年）に4月17日に亡くなりました。74年間の一生を医者として多くの人の命を助けました。また、西井先生は笠岡名物のカブトガニをこよなく愛し続けました。笠岡市にとって、西井先生は、かけがえのないすばらしい業績を多く残したえらい先生でした。

西井先生は、1930年（昭和5年）に第六高等学校（今の岡山大学）を卒業し、1934年（昭和9年）には岡山医科大学を卒業して間もなく、金浦町立病院の副院長として笠岡市に来ました。

西井先生とカブトガニの出会いは次のようです。当時、先生が人力車で生江浜の患者宅に行ったときのことでした。一本の木札に『天然記念物かぶとがに蕃殖地』「指定地内において、カブトガニその卵及幼虫を捕獲してはならぬ」と書いてあるのに、浜にはごろごろと死んだカブトガニがころがっていました。

「これはどうしたことか」と思い、さっそく役場や学校に行っても、誰ひとりとしてカブトガニのことを教えてくれませんでした。困った西井先生は、長い間生江浜漁業組合長をしており、カブトガニのことを知っていた松成鶴吉さんのところへ行きました。「わしについて来なさい。」と言わ

れ、松成さんが生江浜の砂を掘ると、卵の中でクルリクルリンと後ろ回りしているカブトガニの小さい命を見た西井先生は深く感動しました。このことがきっかけとなり、それから西井先生はカブトガニの研究に打ち込まれるようになりました。

また、西井先生は1942年（昭和17年）に自分の専門分野の心臓医学の研究により、医学博士になりました。

日本が世界の国を相手に戦争をしましたが、その時西井先生は、陸軍軍医として中国に行き、戦争によって病気になったり、けがをした人々を助けました。最後はフィリピンのルソン島というところで西井先生の所属する部隊は全滅してしまいました。しかし、西井先生は九死に一生を得て、まるでガイコツのようにやせ細ってやっと日本に帰ってくることができました。「私が生きて帰れたのは、カブトガニが守ってくれたおかげでした。だから、私は死ぬまでカブトガニを守ってやらなければならぬと思っています。」と言いました。



産卵の調査をする
西井先生

西井先生は、岡山県や笠岡市の医師会の理事や会長をして、笠岡市に笠岡病院、スピーチセンター、歯科技工士学院など次々と作っていきました。今でも西井先生が作られたものは笠岡市の医学に重要な働きをしています。また、学校教育にも力を入れて、岡山県の教育委員長をしました。社会奉仕面では、笠岡ロータリークラブの会長としても活躍しました。

1970年（昭和45年）に「笠岡市カブトガニを守る会」をつくり、笠岡湾干拓の工事からカブトガニを守り育てようと、笠岡湾干拓事業所に何度も通いました。そ

の思いがかなって1975年（昭和50年）に「笠岡市立カブトガニ保護センター」ができました。

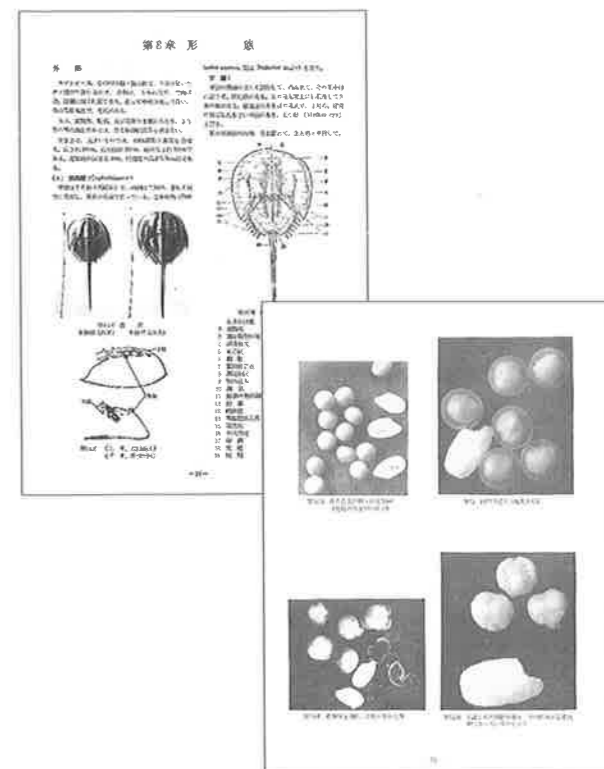
また、西井先生はカブトガニの血液から作られた試薬で人の命が助かりだしたころ、いち早く「カブトガニ献血方式」を発表し、カブトガニの保護を強くアピールしました。

1978年（昭和53年）には「日本カブトガニを守る会」を作り、カブトガニの保護運動が世界に広がるものになりました。

長い間カブトガニの保護や研究をした土屋圭示さんに西井先生との出会いを聞いてみると、西井先生が「私の家の前の106ヘクタールもある富岡湾（今の番町地区）が埋め立てられる時、水をほしがりながら1万匹ものカブトガニが死んでいくのをどうしてやることもできませんでした。」と悔しがっておられたそうです。その言葉に心を打たれて、それ以来土屋さんはカブトガニの保護や研究に打ち込むこ



カブトガニを保護研究をした
カブトガニ保護センター



「カブトガニ事典」の一部

とになったそうです。

動物学者の^{※はたまさのり}畑正憲さんは、西井先生が1973年（昭和48年）に自分のお金で出版した「カブトガニ事典」について、「私は、1ページずつ読み、^{なみだ}涙があふれてきた。カブトガニについてのすべてが実に見事に収められている。」と言われたそうです。

西井先生は、^{み き きねんしょう}三木記念賞や日本医師会最高優功賞など数多くの賞を受けてられています。

蕃殖地…カブトガニがふえ育つ地域で今では「繁殖地」と表記する。

軍医…軍隊と^{いっしょ}一緒に行動する医者。

医師会…医者^のの集まり。

笠岡湾干拓事業所…笠岡湾干拓の工事をする事務所。

カブトガニ献血方式…カブトガニの血液から薬をつくるためにカブトガニの血液を全部抜いていたためカブトガニは死んでいた。それを献血方式で少量の血液を抜き取り、カブトガニが死なないような方法を考えた。

三木記念賞…故岡山県知事三木行治氏が寄付したお金で、社会につくした人に^{おく}贈る賞。

明治の^{ほんやくおう}翻訳王 ^{もり}森 ^た田 ^し思 ^{けん}軒

1861年^{ぶんきゅう}（文久元年）～1897年（明治30年）

○生い立ち

^{もり た し けん}森田思軒は、「^{ひょうりゅうき}十五少年（漂流記）」

を訳した^{※ほんやく}明治翻訳文学の^{※せんくしゃ}先駆者です。

36年の短い^{しょうがい}生涯を^{ほんやく か}新聞記者、^{※ひひょうか}批評家、^{※ずいひつか}随筆家として^{かつやく}目覚しい活躍をします。特にすぐれた外国の文学を日本語に訳して、その仕事により「^{ほんやく}明治の翻訳王」と呼ばれました。

笠岡西本町のロータリーにある広島銀行笠岡中央支店の駅前出張所の入り口左手に、1メートルぐらいの

^{せきひ}石碑が建てられ、表に「^{しけんもりたぶんぞうせいだんのひ}思軒森田文蔵生誕地之碑」と文字が刻まれています。ここが生まれた家の跡で、後に思軒と名乗る^{ぶんぞう}森田文蔵が1861年（^{ぶんきゅう}文久1年）7月20日に父^{さへい}佐平、母^{なおこ}直子の長男として生まれた所です。

^{しけん}思軒の父は、はじめ^{しちや}質屋や本屋を営んでいましたが、明治の初め、笠岡^{※こちやう}の戸長や区長の仕事を勤め、後に岡山県会議員に選ばれ、5、6代目の議長^{くぼやぐん}や窪屋郡（今の倉敷市）の郡長を務めました。この地方の行政、政治に功績のあったすぐれた人物でした。この父から^{しけん}思軒は中国の「^{さいゆうき}西遊記」や「^{さんごくし}三国志」などの物語を聞かされて育ちました。

また、大久保（笠岡市笠岡）に住んでいた^{※おおおじ}大叔父の^{きちぞう}吉蔵からも日本や中国の古い書物を読み聞かされ、^{しけん}思軒は物語のあらすじや人物、地名のほとんどを暗記したといひます。祖父も和歌、俳句や茶をたしなむ^{しゅみ}趣味人でした。こうした近親の人たちによる恵まれた環境で、^{しけん}思軒は幼い時から文学的な



森田 ^{し けん}思軒

えいきょう 影響を受けて成長しました。

しけん 思軒は1872年（明治5年）、12歳のとき、そのころ へんじょうじ 遍照寺内にあった
※けいもうしよ 啓蒙所に入学し、ここへ 2年間通って勉強しました。

けいもうしよ 啓蒙所の先生の勧めで、けいおうぎじゅく 慶応義塾大阪分校に進学し、ここで初めて英語を習いました。

1875年（明治 8年）7月、大阪分校は徳島へ移転し、しけん 思軒も徳島へ行き、翌年の春、東京・三田の本校へ転校しました。けいおうぎじゅく 慶応義塾は、ふくざわ ゆ きち 福沢諭吉が1858年（安政 5年）に開いた、もとはオランダ語の学問を教える塾ですが、三田に移転してからは英学塾として有名でした。現在のけいおうぎじゅく 慶応義塾大学の前身です。

しけん 思軒は英学の勉強にはげみ、英語の実力もつき、塾内でもしだいに学力が認められるようになりますが、突然にけいおうぎじゅく 慶応義塾を中途退学して故郷の笠岡に帰ってきました。1877年（明治10）4月、17歳の時でした。

1879年（明治 12年）2月、しけん 思軒は父佐平のすすめでしつきぐんにしえ ばらむら 後月郡西江原村（現・井原市）にあったこうじょうかん 興譲館に入りました。しけん 思軒の入ったときの館長は、2代目のさかた けいけん 坂田警軒です。しけん 思軒はこの警軒を先生として、めきめき漢学の実力を身につけ、入って2年目には早くも塾頭になりました。

こうじょうかん 興譲館時代に、こうじょうかん 興譲館の中で第一の詩人とうたわれたしけん 思軒の秀才ぶりが伝えられています。たとえば、一本の線香が燃えてしまう間に、百編の漢詩をたちまち作ったという「一線百詩」、一目ですばやく三行ずつ漢文を走り読みし、その意味をすらすらと理解したという「一眼三行」などが、それです。

しけん 思軒の顔は西洋人に似ていたうえ、※さい き 才気にあふれ生意気だったのでしょう。ほかのじゅく 塾生たちからねたまれ、ある日、ふとん蒸しのリンチの計画があるのを知って、夜中に笠岡に逃げ帰りました。こうしてけいおうぎじゅく 慶応義塾につづいて、こうじょうかん 興譲館をまたもや中途退学しました。22歳のことでした。

けいおうぎじゅく 慶応義塾で英語、こうじょうかん 興譲館で漢学を学んだしけん 思軒の学識は、後にとくとみ そ ほう 徳富蘇峰から「漢七欧三」（漢学が7割、英語が3割の学識）と評されました。後年になって、西洋文学を翻訳する文章に苦心し、漢文くずしの「しけんちよう 思軒調」と呼ばれる文体を完成させる基礎は、このこうじょうかん 興譲館時代の3年間にみっちり学んだ漢学によってつちかわれたのでした。

○業 績

1882年（明治15年）、しけん 思軒はけいおうぎじゅく 慶応義塾時代の恩師、や の りゅうけい 矢野竜溪が社長をしていたほうち 郵便報知新聞に入りました。翌年、23歳のとき、りゅうけい 竜溪が書いた政治小説の傑作『けいこく び だん 経国美談』の批評やあとがきを書いて、※ぶんさい 文才が認められました。1885年（明治18年）、25歳のとき、ほうち 郵便報知新聞の通信員としてしんこく 清国（中国）に派遣されててんしんじょうやく 天津条約を取材し、つづいてイギリスに渡り、りゅうけい 竜溪にずいこう 随行してヨーロッパを巡り、アメリカを経て1886年（明治19年）に帰国しました。この間に、すぐれた記事をたびたびほうち 郵便報知新聞に発表し、評判になりました。

しけん 思軒は、ヨーロッパを巡る仕事の帰国後から死ぬまでの、およそ10年間にめざましい活躍をしました。ほうち 郵便報知新聞の記者のトップとして仕事をてきぱきとこなし、とくとみ そ ほう 徳富蘇峰が中心となって発行した雑誌の「こくみんのとも 国民之友」にほんやく 翻訳・評論を発表しました。ほうち 郵便報知新聞をやめた後は、くろいわるいこう 黒岩涙香が東京で発行した日刊新聞である「よろずちようほう 万朝報」の記者となったほか、ほんやく 翻訳、評論、ずいひつ 随筆などの分野で、幅広く多彩な活動を展開しました。

○翻訳の代表作

しけん 思軒の翻訳の代表作は、フランス文学のヴィクトル・ユゴーの社会悪を※じんどうしゅぎ 人道主義的小説「探偵ユーベル」「死刑前の六時間」、ジュール・ベルヌの少年たちの海での冒険を描いた「十五少年（漂流記）」です。この

ほか、英米のディケンズ、ホーソン、アービン
グ、ポオなどの小説を翻訳して、西洋（外国）文
学の面白さや魅力を、広く大衆に紹介した仕事
は輝いています。そのすばらしい翻訳によって
「翻訳王」と呼ばれ、翻訳小説を文学作品にまで
高めた業績で、近代文学史上に大きな足跡を残
しました。



翻訳の代表作
「十五年」

○思軒の死

思軒は、1897年（明治30年）11月14日、腸チフスがもとで36歳の若さで
多彩な生涯を終わりました。臨終をみとった森鷗外、幸田露伴の両文豪が、
※戒名をつけました。思軒の墓は東京・根岸の世尊寺にあり、分骨された墓
が笠岡市の笠岡小学校北の墓地にあり、父佐平・母直子の墓、先祖を供養
するための墓と並んで建っています。

※けんしょう ○顕彰

1973年（昭和48年）6月、笠岡
にある思軒の墓が、笠岡市の文
化財に指定されています。また、
思軒の子孫に当たる東京都東久
留米市の白石家から、思軒の
※遺稿・手紙その他の資料が、笠
岡市へ預けられたのを機会に、
著書・自筆原稿・手紙・愛用品
などを展示し、思軒の業績をた



笠岡市立図書館内にある
森田思軒顕彰コーナー

たえ、さらに後世に伝えるため、2000年（平成12年）4月に笠岡市立図書

館2階に「森田思軒顕彰コーナー」を設けて、一般に開放しています。

翻訳…ある言語で表現されている文を、他の言語になおして表現すること。

（例）英語を日本語に翻訳する。

先駆者…他の人に先立って、新しい分野を切り開く人。

批評…事物の善悪・優劣・是非などについて考え、評価すること。

随筆…見聞したことや心に浮かんだことなどを、気ままに自由な形式で書いた文章。

戸長・区長…明治時代の役人で今の町・村長にあたる。

大叔父…祖父母の兄弟。

啓蒙所…今の小学校のこと。

才気…すぐれた頭のはたらき。

文才…優れた詩文を作る才能。文筆の才能。

天津条約…朝鮮での事大党と独立党の紛争の結果、1885年に日清両国が天津で結ん
だ条約。両国の駐在兵は引きあげること、朝鮮へ出兵するときは両国間で互
いに通知し合うことなどを内容とする。

人道主義…人間愛の立場から人々の福祉を図ろうとする考え。

文豪…非常にすぐれた文学者。

戒名…仏式で、死者につける名前。

分骨…死者の骨を二か所以上に分けて納めること。また、分けて納められた骨。

顕彰…隠れた功績・善行などをたたえて広く世間に知らせること。

遺稿…未発表のまま死後に残された原稿。

原稿作成協力者

上蘭四郎氏：小野竹喬

(笠岡市立竹喬美術館主任学芸員)

長田暁一氏：井戸平左衛門

(威徳寺住職)

定金恒次氏：木山捷平

(岡山大学講師)

清水友美氏：小寺清先

(郷土史家)

谷口靖彦氏：佐藤貫一、関 梟翁、関藤藤陰、

(森田思軒研究家)

津田白印、森田思軒

土屋圭示氏：西井弘之

(日本カプトガニを守る会会長)

楠戸宇亭氏：題字

発行者：笠岡市文化連盟（事務局：笠岡市教育委員会文化課内）

笠岡市文化連盟40周年記念事業実行委員会

会長：安藤一泉

天野ルリ子 安藤文子 井上二郎 内田寿恵美

内山信子 塩田啓二 高田明子 鶴井一巳

中田康生 仁科宰治 花木芳郎 三谷克輔

吉原千鶴子 和田初子

印刷：(有)国輝堂印刷所

発行：平成14年5月